

同人作品

片明り 秋山義仁

トンボ追いこの道駆けた高い空今は寝転びただ空見てる
笑い合う少女婆様昔事携帯片手に押して笑って

山は春下枝は入水せむばかりほんのりうすべに一重の桜

山辺につぼみ集めて春が来る梅桃桜一緒に咲いた

奥津軽家の廂は上目づかいまぶた委縮することが生きること
殻を脱ぎ女は一人陽を浴びる時は行ったり来たりなめて行く
蓑虫がきりきり巻いて冬津軽父は出稼ぎ母は内職

雪の色しかない野の外れ緑色のリヤカーありて果てへと進む

雪止みて東の空の片明り世の塵を全てかくして鳥二羽
雪が泣き犬吠える里の雀千羽百舌に舞い上りまた舞い戻る

暗闇にカエルが笑う 石邊綾子

記憶ってどこへゆくのかあの丘の上に開いた花火のような
里山のトンネルいくつ潜り抜け雨の匂いの記憶まぶしい
目の前が真っ暗になる瞬間もいつしか忘れカエルが笑う
この先は見ないでいいと言うようにカエルの両目はぐるりと閉じる
側にいるずっといるからこの先もさみしくないと言った先から
一人きりここには誰もいないから芝生を渡る風を感じて
青空は雨に洗われ田舎道白いクレープをおいかけてくる
墓園へと続く道ありせせらぎの林を抜けて稲田を過ぎて

あと何年帰れるだろうヤマツツジひっそりと咲き迎えてくれる
手桶から汲み出す水に映る空だれかがそっと覗いた気がして

A席は焼津の富士に会うための一か八かの運試しなり

本当にあつという間の富士山で使い果たしたラッキーポイント
転んでも誰も助けしてくれないと白い花びら踏みつけながら

ハナミズキは雨に濡れつつ多摩川の流れを暗く見つめておった

A Iに虐げられた者たちの末路に咲いたタンポポひとつ

この春を謳歌するかのモクレンの並木をゆけば笑い声する

苦しみを乗り越えて 井上省吾

これまでは家土地なくて仮住い自分の家が欲しくてならぬ

金は無くローンを組んで無理をして家を建てたが返すあてなし

単身で働きにいく東京セールスマンで三年余り

二棟目の家土地同時購入また繰返す金の支払

新築の家に移りて仕事なく仕事探して駆回る日々

金苦にて家族皆んながアルバイト苦難乗越え働いてきた

夜勤明けラジオで聞いた一報は阪神淡路大震災なり

苦しみを乗越えて知る想い出は一段昇る踏台だった

人生はあつと云う間の夢の旅いろいろあつた想い出ばかり

雲が行く西から東ゆっくりと綿菓子のようなふわふわとして

シェフレラの五月に 甲村雅俊

花まつり華やかにして大輪の白菊かざり手を合せたり

飼ひ猫は少し離れて医者の中で机に伏せる吾を見てゐる

トイレにて吐瀉する我の後ろからいつもの通り猫の擦り寄る
仏様たすけましませわれはいま闇に沈みてメラメラ阿修羅
釈迦弥陀の慈悲によりてぞ仏心は我らに宿る南無阿弥陀仏
土中から芋虫のこのこ顔を出す水遣り過ぎのシェフレラの鉢
丈高く葉の美しきシェフレラの大きく育ち嬉しかりけり
シェフレラは育て易いと言ふ話なほ伸びゆくか千代に八千代に
新しき緑かがやく五月にて弊えしきみを悔みてゐたり

初恋 氷室敬子

お腹が痒い背中も痒いこれが老人の乾燥肌のことか
昔々おばあちゃんに百円もらい背中かいてあげたこと思い出す
初恋のあの子は白うさぎの毛を巻いてかわいかった

初恋っていいね温かいお湯につかっているみたい

桜前線 本田洋子

風吹かば家の中へと逃げ込んで春一番に布団被りぬ

水温み霜焼け一つ治る頃桜の蕾膨らみにけり

金星と木星寄ってランデブー群青の空に輝く二つ

ストックの只一鉢に癒されて香鮮やか吾を励ます

よたよたの老犬の歩みに寄り添って見守り歩むあるじの優しさ

夕五時のマンションの灯は未だ着かず夕日赤々日は延びにけり

聡太さん勝負強さで受験生合格成就のお守りと成り

今日は今日楽しめばいい一日をそれができない憂鬱の吾れ

ほらあそこここに一輪ポツポツと咲き始め頃桜前線

朝五時のコーヒータイムに流れ来るパツフェルベルのカノンの軽ろやか
三月の寒の戻りと雨粒にハクモクレンの花びらぞ散る

濃いピンク花桃とふと鳥たちが来て花びらをご馳走にしたり
忙しく花鳥風月疎かに暫しブランコに揺られてみる

桜は五分こちらは山茶花ポタポタと赤い花びら周囲に落とす

鎌倉の生ワカメをばヌルヌルと届けてくれし逗子の友人
ヌルヌルのワカメ湯通しし鮮やかな緑美し三杯酢でちよつと

海岸に打ち上げられしワカメ漁茹でて干して春の風物

雪柳アセビに桜ヒヤシンス団地の公園春爛漫

憧がれの人は遠くに去るものと物心着く頃空のからげた箱で

トントんと足音響くあどけなさ二階の家にひ孫来ており

はな桜吹雪吹き寄せられて境内のみ仏おわす膝元にかかり

三月に遠き記憶を手繰りては言葉を集め編んでる吾れは
真冬でも湯船の嫌いな私は暖かき昼シャワーを浴びる
鶯は必ず一対つがいで飛んで来るこちらから見える垣根の隙間
桜散り東の空がほの明かり積み重なりし冬物仕舞ふ
間に合わぬ気温は段々上昇しからだの一部冬感覚で

祈り

病床から優しき電話くれし人話題はいつも歌のあれこれ
足病みて杖を頼りの歩行なりそれでも娘に食事を運べり
春休み孫達一家に会いたくも羽田空港さへも歩けず